

Cutting-Edge

[カティング・エッジ]

Move この人に聞く

変わる勇気、変える面倒 地方自治体ポジティブ・アクションの実践

北九州市役所では、この8月に市の女性職員のためのポジティブ・アクションとして、「女性活躍推進アクションプラン」をとりまとめた。北九州市の女性職員の登用状況をみると、全職員の30%が女性であるが、課長以上の女性割合は6.2%、係長以上は12.1%と活躍する女性は少ない。これらの指標はいざれも17ある政令指定都市では最下位レベルであり、過去10年間の変化は微増にとどまる。

アクションプランでは、①政策決定の場における活躍の推進、②男女間の育成格差の是正、③女性が能力を発揮しやすい職場風土づくりの3点に重点をおき、女性登用の数値目標を含め11の数値目標と、その達成のための24のアクションを盛った。このアクションプラン策定の過程で、女性の活躍を阻害している諸要因がみえてきた。

第1は、今まで組織に女性の幹部を育てるという意識や努力がなく、男女の育成の格差が著しいことである。このために、男性幹部なら必須科目の議会対応、人事、予算編成などの経験をもつ女性が少なく、上級幹部の候補が少ない。育てていないから育っていないのである。

第2に、係長試験が難関で投入勉強時間勝負であり、合格まで何年間もかかること、しかも受験期が子育て期と重なり、女性にきわめて不利であることである。30歳前後で受験資格ができ、何年先に合格するのか見込みが立たない中で、試験勉強と出産・子育てのどちらを先にするか人生設計ができず、女性たちはチャレンジを躊躇する。この結果、女性の受験率、合格率はともに男性の半分となり、女性係長の層が薄いままでいる。

第3に、「成績主義」や制度的な機会均等に対するやや硬直的な信仰である。現状は「成績主義」の結果であるから公正であり、女性を対象とした特段の措置は成績主義に反する、というのが慎重派の主張である。しかし、能力を高める機会が同様に与えられなければ成績主義は公正に機能しないし、女性に不利であることが明白な試験制度を維持することは実質的な機会均等とはいがたい。公正とはいえない結果を系統的にもたらす仕組みは、改める必要がある。

第4に、形式的な機会均等以外の措置を探ることに対する抵抗感である。特に、女性活躍の取組が始まると前に、議会で「成績主義の観点から登用の数値目標は設定しない」との市長答弁がなされたため、職員も議会の一部もこれを固く信じていた節があり、職員への説明と議会答弁の変更に相当のエネルギーを要した。

第5に、女性職員にみられる警戒感である。意外にも、女性たちからは今までの「冷遇」への怒りは聞かれない。アクションプランをきっかけに登用されて目立つことや、その結果つぶされることを警戒しているように見える。本心はどうか。今後の活躍を大いに期待したい。

多くの地方自治体で、制度的な機会均等がひととおり整った上で、実質的な機会均等をどう実現するかが課題となっている。紋切り型の思考で現状を正当化することは簡単である。一方で、現状を本気で変えることは面倒だ。現状をどう見るか、なぜ格差が生まれるのか、今までの仕組みが公正なのかどうか、どうすればより公正な仕組みができるのか。自分の頭で考え、「今までいい」、「変えることは損だし面倒だ」と思っている人たちを変えねばならない。その鍵を握っているのは、トップと組織の「変わる勇気」である。



CONTENTS

Move この人に聞く	p.1
Books ジェンダー最・前・線	pp.2-3
Information	p.4



北九州市副市長

麻田 千穂子
(あさだ ちほこ)

未来・ことば

女性が自分らしさを損なわ
れずに幸せに生きていくに
は、心やさしく、しかもたく
ましくなければならない。また、
大切なのは自分で、自分の価
値観や選択であることをすでに確
信しているか、あるいは常に自分に
いいきかせていくなくてはならない。

マヤ・アンジェロウ

(アフリカ系アメリカ人詩人・作家)

『私の旅に荷物はもういらない』(宮本陽子訳、立風書房、1996年)

カミングアウト・レターズ—子どもと親、生徒と教師の往復書簡

本書は、自身の性的指向が同性に向くことに、成長のある段階で気づいた子どもたちが、その事実を周囲の身近な人々にカミングアウトしたことをめぐってなされた子と親、生徒と教師の7組・19通の往復書簡集である。

レズビアン、ゲイ、バイセクシュアルの存在と生きる権利が大きな関心を持たれている今日、これをテーマとした書物は多数出版されている。そのなかで本書は、成長過程にある子どもと親、生徒と教師という当事者の成長過程に深くかかわる関係に着目し、当事者と彼らを取り巻く他者（異性愛者）との間の相互受容と共生のプロセスを、第三者を介在させず、直接関係を取り結ぶ同士の生の言葉で表現しているという点できわめて興味深い。

本書は、同性愛に関する正確な情報がいかに当事者を孤独と悩みから解放するか、当事者との共生に必要であるか、当事者自身が自らの事実を語るという行為・カミングアウトが、当事者の尊厳の確保にいかに重要な意味を持つ

いるかということを浮き彫りにしている。語ることによって他人との関係が深まり、絆が結び直されるのだということが読む者的心にストレートに伝わる書である。

同性愛

性愛の方向性（性的指向）が同性に向いていること。同性愛者は一般にゲイ、レズビアンと呼ばれ、性的マイノリティのなかで多数を占めている。異性愛・結婚・生殖を三位一体とする性モラルと家父長制秩序を維持する必要性から、同性愛は長い間「異常」「性的倒錯」とされ、排斥や揶揄の対象とされ続けてきた。今日では同性婚を認める国が出現するなど、当事者の尊厳と人権の確保が進みつつある。



- RYOJI、砂川秀樹 編
- 太郎次郎社エディタス
- 2007年初版
- 1,700円（税別）

あさの ふみえ
浅野 富美枝（宮城学院女子大学学芸学部教授）



大奥 1-3巻（以下続刊）



- よしなが ふみ 著
- 白泉社
- 2007年刊（3巻）
- 590円（税別）



若き実力派・よしながふみが送り出す、人気マンガ。世に溢れる「大奥」物とは異なり、「男女逆転大奥」、すなわち將軍が女性、大奥に務める者たちが男性という設定だ。

徳川幕府開設の30年後、若い男子だけが權かる伝染病が列島を襲った。この時三代將軍家光も世継ぎをもうけず伝染病で密かに死んだ。しかし家光には死去以前、お忍びで町娘を姦めさせた女児がいたことが分かり、春日局はこの女児を大奥の内々では「上様」として扱い、公的には、家光の死去は伏せられ老中の1人が家光のダミーを演じてきた。こうして公私のねじれた「男女逆転大奥」が生まれる。しかし3巻最後では春日局の死去とともに、ついに「女將軍家光」が、大名たちにお目見えする。「男女逆転」が公的に示された後はどうなるのか、今後の展開が待ち遠しい。

本書の面白さは「公／私」「運命とエゴイズム」の関係など數あまたあるが、ジェンダーに関しては2つに約言できよう。1つは

「男女逆転」と謳いながらも、よしながは随所で、性役割だけを逆転させたうえで性規範をそのままにしてみせる。このことによって、私たちは性別に付随する性規範の習い性に気づくことになる。今1つは違った性の世界を想像させる「クイア」な実践に溢れているところにある。第5回センス・オブ・ジェンダー賞受賞。

クイア

どうしてこうも私たちは「もしこの世界が別の在り方で成立していたら?」という考えをつい忘れてしまうのか。それは性のできごとが、ジェンダーの一方にもセクシュアリティの一方にも還元できないクザツで絡まつた「常識」から構成されているせいだろう。クイアとは、強制異性愛と性別二元制（困難ではあるが）同時に問題化・解体化し、今眼前にあるその「常識」を逆手に用いて「違う世界」を想像させる実践のことである。『大奥』にはそれがある。クイア学会趣意文も参照されたし。

いしだ ひとし
石田 仁（国際基督教大学他非常勤講師）

ことばとジェンダーの未来図—ジェンダー・バッシングに立ち向かうために



- 遠藤織枝 編著
- 明石書店
- 2007年初版
- 3,800円（税別）



日本語の女性差別に興味をもった女性はたいてい『日本語と女』（1970年）を読んでいると思う。国語学者の寿岳章子が著した岩波新書である。その寿岳章子の1周忌を前に現代日本語研究会が、「ことばとジェンダーのこれからを考える—寿岳章子さんの志をうけついで」と題するシンポジウムを企画した（2006年7月8日）。「研究と実践を見事に一致させて『女性解放と平和の確立』を目指して生きた寿岳章子のことを多くの人に知ってほしいという主催者の「思い」に、折から噴き出していた「ジェンダー・フリー」論争が引火した。

本書は、そのシンポジウムの記録（I部）と教育現場のジェンダー教育実践例（II部）を紹介して、「ジェンダー・フリー」ということばの何が問題なのかを論述するIII部に繋げられている。日本におけることばとジェンダー研究は、80年代以降増え続け、量的にはけっして少なくない。しかし、大半は

伝統的な学問枠での研究であり、フェミニズム運動として「大きなうねり」になって来なかった。日本の知の保守化がいわれるゼロ年代、「ジェンダー・フリー」バッシングに真っ正面から向き合ったことばとジェンダー研究として、本書は画期的である。

ことばとジェンダー研究

女性差別文化が言語によって構築・維持されるものであるといふ気づきに促されて立ち上げられた学際的な研究領域である。アメリカでは、70年代半ばから全国的に広がった。英語からの性差別撤廃運動を理論的に妥当化することが目的であった当初は、*women and language*（女性と言語）などと呼ばれたが、フェミニズム理論の焦点が文化的に構築された差異としての「ジェンダー」にシフトするなかで *language and gender studies*（ことばとジェンダー研究）と呼ぶことも多くなっている。

あきば
れいのるず=秋葉かつえ（ハワイ大学東アジア言語文学部教授）



不安な兵士たち—ニッポン自衛隊研究

自衛官の役割や尊厳とジェンダーをも含むアイデンティティの不安を描き出した本書は、原書の副題「ジェンダー・記憶・大衆文化」が読み解きのキーとなる。著者によれば、この3つは自衛隊が対処をせまられ続けてきた難問であるとともに、憲法を改正し日本を「普通の国」にしようという、より大きな問題に取り組む足がかりでもあったのだ。

このような視点から、基地資料館を集合的記憶をつくりだす装置として分析した第5章は白眉である。過去の負の遺産をぬぐいさりつつ隊員の士気を高めようとして、資料館は一方で旧軍との断絶を強調し、他方でその連続性を打ち立てるという矛盾に満ちている。

大衆文化の技法をとりいれたポスターや漫画、戦力を誇示する公開演習といった自衛隊のイメージづくりもまた、時に非武装化して自らをカムフラージュし、時に男性化して勇ましさを誇示する矛盾に満ちたメッセージであふれている。

そして、矛盾は兵士たちのアイデンティティ形成にもあらわ

れる。外からは一枚岩と見られるがちな自衛隊・自衛官の不安(寄る辺なし)を繊細に描き出した本書は、軍隊とジェンダーに関心を持つすべての者にとって必読の書だ。

不安

本書では、不安は単に「戦いを禁じられた」という日本の特殊性ではなく、(戦闘よりも人道救助が主たる任務となりつつある)軍隊のポストモダニズム由来するものとしてより広い文脈に位置づけられている。湾岸戦争以降の自衛隊の海外派遣は軍事主義の復活なのか?それとも著者のいうようにPKO兵士とは国家間戦争を担う戦士よりも山火事で救助にあたる消防士に近い存在なのか?不安をキーワードに日本の軍隊と兵士の姿に新たな意味を見出す著者のテーゼに対し、私たちはこの新しさをジェンダーの視点から批判的に見つめる必要があるだろう。

さとう ふみか
佐藤 文香 (一橋大学大学院社会学研究科准教授)



- サビーネ・フリューシュ
トゥック著
- 花田知恵 訳
- 原書房
- 2008年発行
- 1,900円(税別)



叢書 文化学の越境 13 女と子どもの王朝史—後宮・儀礼・縁

成人男性中心の歴史観を解き放ち、「女と子ども」の側から平安王朝の儀式、儀礼、家、親族関係を分析する論文集。90年代の『平安朝の母と子』『平安朝の家と女性』以来、近時の『平安王朝の子どもたち』『平安王朝社会のジェンダー』まで、瞠目すべき成果を次々に世に問う服藤早苗の編集らしい高水準の書物である。

東海林亜矢子の『女房女官饗禄』以下重要な論考がずらりと並ぶが、中でも、『王朝撰閑期の養女たち』(紫式部学術賞)をはじめ貴族社会の養子縁組論を精力的に構築する倉田実の『平安朝の移動する子どもたち』、高群逸枝の『招婿婚の研究』以来の婚姻研究史を適切に踏まえた星倭文子『鎌倉時代の婚姻と離婚』などが出色。『源氏物語の性と生誕—王朝文化史論』など、服藤と共にこの分野を牽引してきた小嶋菜温子は『王朝の家と鏡』で、『竹取物語』と『落窓物語』の女性の結婚という問題を通して家や系譜にまつわる諸問題

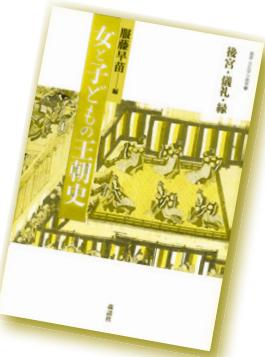
を鮮やかに分析し、充実したこの書物を締めくくる。

あとがきに記された、服藤主宰の研究会の充実した歳月によって本書は支えられているが、その豊穣たる稔りは、服藤はもちろん、本書の寄稿者の今後の活躍の予感まで与えられる未来に向かう一書でもある。

招婿婚の研究

平塚らいてうらと共に女性運動の実践に携わると共に、広く資料を調査して女性史研究や婚姻史研究の基礎を固めた高群逸枝の代表的著作。群婚、妻問婚、婿取婚、嫁取婚の変遷を実証的に解明し、中世以前の婿取婚の実態を明解に通史的に位置づけた。あらゆる学問は聖典として絶対視されるものではなく、批判的に継承されるべきものだが、近年の『招婿婚の研究』ほど論者による毀譽褒貶の甚だしい書物はない。それだけ学術史的にも思想史的にも、現役であり続ける書物なのである。

たさか けんじ
田坂 憲二(福岡女子大学文学部教授)



- 服藤早苗 編
- 森話社
- 2007年初版
- 2,900円(税別)



新刊・新着本紹介



男女共同参画白書
(平成20年版)

- 内閣府
男女共同参画局 編
- 佐伯印刷株式会社
- 2008年発行
- 2,571円(税別)



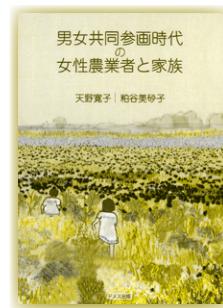
現代世界の女性リーダーたち
—世界を駆け抜けた11人

- 石井 貴太郎 編著
- ミネルヴァ書房
- 2008年初版
- 3,200円(税別)



ジェンダーで学ぶ文化人類学

- 田中 雅一
中谷 文美 編
- 世界思想社
- 2005年初版
- 1,900円(税別)



男女共同参画時代の女性農業者と家族

- 天野 寛子
柏谷 美砂子 著
- ドメス出版
- 2008年初版
- 2,400円(税別)



女性が福祉社会で生きるということ

- 杉本 貴代栄 著
- 効草書房
- 2008年初版
- 2,500円(税別)





ジェンダー・エッセー

天使とロケット

毎日新聞論説委員(科学環境部編集委員兼務) 青野 由利 (あおの ゆり)

「サイエンスエンジェル制度」「ロケットガール養成講座」。お堅いはずの大学が、奇抜なタイトルのプロジェクトを打ち出すようになったのは、ここ数年のことである。

前者は東北大学の制度で、理系の女性大学院生が「科学天使」となって女子学生と交流し、科学者になりたい女の子のロールモデルになろうという趣向である。後者は秋田大学の企画で、全国の女子高校生を対象にロケット作りと打ち上げを体験してもらい、理系への進学を後押しようという試みだ。

こうしたプロジェクトの背景には、政府が「女性研究者支援」を打ち出していることがあるだろう。女性と科学の関係は、変化しつつあるのだろうか。

日本は女性研究者が少ないという話は、繰り返し指摘されてきた。総務省の「科学技術研究調査報告」によると、07年3月時点での女性研究者の割合は12.4% (図1)。このところ増加しているとはいえ、米国やフランス、英国などに比べると半分以下で、スペインに比べると3分の1の割合だ。大学の教授職に占める女性の割合をみても、理学系や工学系は極端に少なく、ポストが上がるにつれ女性の割合が減っていく。

こうした状況の中で、政府は06年度から5年間の「第3期科学技術基本計画」に女性支援を盛り込んだ。この流れの中で、文部科学省は06年度から「女性研究者支援モデル育成事業」を開始し、今年度までに33大学・機関のプロジェクトに予算を拠出している。東北大学の企画もその1つだ。

これらのプロジェクトが、どれほど功を奏するのか。結論を出すのは早計だろう。ただ、それぞれの大学や機関の企画を眺めていくとも考えることがある。「世の中にさまざまな職種がある中で、特に女性研究者が抱える問題は何か」ということだ。

最近目にしたアンケート調査は、それを考える上で参考になるかもしれない。文部科学省の委託を受け、男女共同参画学会連絡会がまとめた実態調査である。回答したのは自然科学系の分野の研究者約1万4000人で、26.7%を女性が占

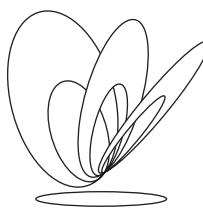
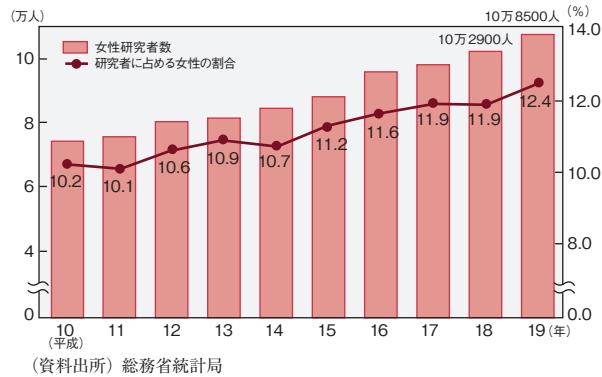
める。

調査結果の中で研究者に特有と思えるのは、ポスドクを筆頭とする「任期付きのポスト」が与える影響である。科学者の世界では、ある時期から「流動性」の重要性が強調されるようになった。特に若手研究者を任期付きで採用し、流動的な研究環境を創出することが研究の活性化につながるという理屈だ。この考えには一理あるとは思うが、それは流動化とともに環境整備が伴った時の話だろう。受け皿がないままにポスドクをどんどん増やした「1万人計画」は、不安定な雇用につながり、女性研究者の生活が魅力的にみえないというマイナス効果を生んでいるのではないだろうか。

ただ、もう1ついえるのは、女性科学者が抱える多くの問題は、どの職種にも共通であるということだ。「女性の年収が少ない」「女性に比べ男性が家事をしない」「育児を終えてからの仕事への復帰が困難である」といった問題だけではない。女性研究者の3人に2人の配偶者が「研究者」であるのに對し、男性研究者の半数以上の配偶者が「無職(専業主婦)」であるという状況も、科学者に限らず専門職にはありがちで、それが女性の働きにくさにつながっているのではないだろうか。

ロールモデルは確かに大事だが、天使やロケットだけでは根本的な変化は望めない。「社会全体が、なぜこうも変わらないのか」という思いを抱いているのは、科学記者である私も同じである。

図1 女性研究者の推移



北九州市立
男女共同参画センター
ムーブ

〒803-0814 北九州市小倉北区大手町11-4
Tel: 093-583-3939 Fax: 093-583-5107
ホームページ <http://www.kitakyu-move.jp>
E-Mail move@move-kitakyu.jp

Cutting-Edge 第32号

【発行】 北九州市立男女共同参画センター“ムーブ”
【発行日】 2008年9月20日